

りんご並木と飯田のまち

飯田市の中心市街地に走る2本の通り。並木通りと称される道には、多くのりんごの木が植わっている。その世話をしているのは、飯田東中学校に通う207人の生徒だ。飯田のまちとともに成長してきたりんご並木について紹介しよう。



収穫したりんごは常態によってA～Cに分けられる

「みすつがる」の収穫。生徒たちが自発的に役割を振り分け、スムーズに作業が進む
フリモARで動画をチェック！アプリを起動してスマホをかざし、りんごの収穫風景を見てみよう

フリモAR アプリをダウンロード

App Store からダウンロード Google Play で「フリモAR」を検索

※AppleおよびAppleロゴは米国その他で登録されたApple Inc. の商標です。App Store®はApple Inc. のサービスマークです。※Google Play およびGoogle Play ロゴは Google Inc. の商標です

① フリモARのアプリをダウンロードして起動 ② マークがついた写真にカメラをかざすとスキャンがはじまります ③ スキャンに成功すると動画がスタート！ ※写真の向きにあわせてカメラをかざしてください

自分たちが育ててきたりんご 今年の収穫はいかに？

市民にとっては見慣れた光景だろう。並木通りのりんごの樹々が今年も多くの実を实らせ始めた。ふじや王林といった定番のものから、ニュートンのようにあまり聞きなれない品種まで、並木通りには13種26本のりんごの木が植えられている。その管理に、体操服姿の中学生が奮闘する姿も、地域で暮らす人にとってはまちの風物詩だ。

8月27日、立つているだけで汗が噴き出すような暑さの中、早くも収穫に向かう中学生の姿があった。品種は「ニュートン」と「みすつがる」。加工に向いた品種で、ジャムやジュースになるという。生徒たちはそんなりんごを前に手際よく脚立を用意し、木になった実をもうでいく。りんごをもぐ人、選果をする人、傷んだりんごを埋めるための穴を掘る人など、役割を分担。「そのまま食べられるほどきれいなもの」「加工すれば食べられるもの」「食べられないもの」とランク分けし、次々とかがが埋まっていく。

「今年は酷暑の影響で、だめになってしまったものが多く、残念」と同行した教師は話す。なかには木になっても、熟しすぎて虫が集っているものささえあった。しかし、きれいなものだけではなく、すべての世話をしているからこそ、りんご並木を管理しているといえる。そんな教師の声を、生徒たちは胸に刻んでいるようだった。

まち並みも住む人の心も 美しいまちをつくりたい

飯田東中学校は、昭和22年に東野国民学校から改称され生まれた。「聡明・自主・愛他」を学校目標に掲げ、一時は1500人以上の学生が通うマンモス校だったという。そんな中学校がりんご並木に関わり出した発端は、創立からひと月も経たないうちに見舞われた飯田大火。飯田城の城下町として栄え、「信州の小京都」といわれたまちは、大半が焼失する被害を受けた。

焦土と化した飯田市が新たなまちづくりを進めるなか、飯田東中学校の学友会も奉仕活動を開始する。大火直後から町内清掃を実施。昭和28年には、まちを4分割するようにつくられた防火帯道路に、りんごの木を植える活動がスタートした。



昭和28年の植樹の様子。まち並みも住む人の心も美しくしたいという思いで行われた

「全校講話で、当時の校長だった松島八郎先生がヨーロッパにあるりんご並木の話をされたそうです。ここでは、落ちた実を備え付けのかがごに入れ、盗む人間はいない。それを見習い、新たな飯田市は景観も住民の心も美しいまちにしていきたい。そんな提案に生徒たちは共感しました」と熊谷邦千加校長は話す。

当初、行政からは予算の不足や維持管理の問題、りんごを盗む人が現れるのではという懸念など、さまざまな心配が寄せられた。実際、植樹直後は食糧不足などでりんごを採られてしまい、たった4つの実しか収穫できなかった。しかし、生徒たちによって植えられ、育てられたりんごの木は、徐々に飯田のシンボルとして定着。多くの人から励ましの声が届いたり、手伝ってくれる人が現れたり、まさに飯田東中学校が目指した「心の美しい人の住むまち」になっていった。

りんご並木から学ぶ 郷土愛と自主性

中学生によるりんご並木の管理は、平日に週5回行われている。除草や摘果をこまめに行うほか、農業高校の生徒や地域の人々と一緒に並木周辺に花を植えたり、小学生と一緒に収穫したりと、地域を巻き込んで取り組んできた。

そんな活動を中心になって支えているのが、飯田東中学校の並木委員会だ。毎年1月に委員が選出され、現在は23人が所属。今年の委員長は3年生の矢野茜里さんが務める。「1月に年間計画を立て、細かな

調整は2週間ほど前にします。前もって細かく計画を立て、準備しなければ、アクションがなかった時に対応できない。事前準備の大切さを委員会活動で学びました」と矢野さん。

そんな矢野さんだが、最初から並木委員に興味を持っていたのではない。1、2年生は別の委員会

で活動し、3年生から並木委員となった。「除草作業など、大変そうだなと思って避けていました。ですが、2年生の時に除草作業をクラスとして、とても達成感があったんです。また、収穫したりんごを地域の人や観光客に渡すと、とても喜んでくれる。そうした魅力を、みんなに発信したいと思い、3年生から並木委員になりました」と話す。

「りんご並木の活動は、命を慈しみ、まちづくりに貢献するのが目的。それは自己研鑽にもつながります。先輩から後輩へ活動の意義ややりばらしさが伝わり、自然と自主性や郷土愛が育まれているのです」と熊谷校長も続けた。

そうした活動が実り、りんごの収穫数は、当初とは比べ物にならないほど伸びている。現在はおよそ1万1千個、多い年で1万3千個ほど収穫できた。そのりんごはりんご並木の管理に協力してくれた人へ贈り、生徒たちが持って帰る。また、ジャムやジュースに加工し、地域のイベントで販売している。



1



2



3

「今まで並木が維持できているのは、先輩方の努力や地域の方々の協力のおかげです。多くの人からの支えに感謝し、これからも活動が続きたいです」。矢野さんの真摯な思いは、間違いなく後輩たちが継いでいくだろう。これからは、並木通りでは立派なりんごが実り、色づいていく。まるで飯田市の美しさを表すように、中学生たちとまちの人々の思いを受けて。



並木委員長 矢野茜里さん 飯田東中学校 熊谷邦千加校長

フリモARで動画をチェック！アプリを起動してスマホをかざし、懐かしい校舎内を見よう



4

1. 昭和28年に植樹された「紅玉」。60年木と呼ばれ、大切に管理されている
2. 今年の収穫量は猛暑の影響で少ないというが、例年はすべて合わせて1万個以上を収穫できる
3. 飯田東中学校内には、りんご並木資料館がある。なかには、古い観察日記などが保存されている
4. 飯田東中学校には、現在207人が通う。「自分たちの行動を自分たちで律する」という校風で、自主性を育む